ふるさと大使

帰郷インタビュー

講談師 日向ひまわりさん

三原市ふるさと大使の日向ひまわりさん。歴史にちなんだ読み物を観客に向かって読み上げる講談師として、東京都内の寄席や全国各地での公演会など、数々の舞台で活躍しています。また、市内の学校や施設をたびたび訪問し、本場の話芸を披露してくれています。帰郷したひまわりさんと思い出の場所を訪ね、故郷三原・大和町への思いを聞きました。

▲秋祭りに参加していた市岡八幡神社(大和町萩原)で

―大和町の思い出を聞かせてください

山、川、田んぼ、自然豊かな景色を思い出します。夏は、家族で蛍を見に川へ行きました。自宅裏の小川にも蛍がいて、フワっと家の中へ入ってくることもありました。春の桜、秋に色づくイチョウの木、冬の霜柱。友達と小学校のグラウンドで遊んだ記憶は、四季とともにくっきりと残っています。

季節を感じることのできる匂いって分かりますか?夏はムワっとした土の匂いであったり、秋は稲穂や稲を刈った後の田んぼの匂いであったり。冬も鼻の奥がツンとするような匂いがありますよね。東京ではさほど感じませんが、今でも里帰りすると感じます。

―故郷を思い浮かべて、イメージする場所はどこですか

実家のパン屋ですね。小学生のとき、授業中に友達が「パンの匂いがする」と言いました。たどっていくと私。給食前で嗅覚が敏感になっていたこともあったのでしょうが、制服に焼きたてのパンの匂いが染みついていたのです。

あと、市岡八幡神社の秋祭り。当日は各地区から提灯行列が神社に集まるのですが、そのようすが光の帯のようでとても美しいのです。祭りでは夜遅くまで神楽が舞われるのですが、この日だけは子どもも夜更かしを許されていて、朝から楽しみにしていました。

ふるさと大使として市民に生の講談を届けています

【プロフィール】
昭和50年２月生まれ、大和町出身、東京都在住。平成６年に講談師２代目神田山陽に入門し、神田ひまわりを名乗る。平成10年に二ツ目昇進、平成11年に若手演芸家に贈られる第４回岡本マキ賞を受賞。平成20年に真打に昇進し、神田改め日向ひまわりとなり、現在に至る。

―里帰りしたときの印象は

三原の子どもは純粋で元気ですね。真っ直ぐでキラキラ輝いた目、純真な心、大きな声の挨拶、すべてに感動します。三原の子どもには、私の思う「これが子どもだ!」のすべてが揃っています。子どもだけでなく、多くの人に生の講談をお届けし、笑顔になってもらいたいです。

―ふるさと大使としてどんな活動をしたいですか

多くの人に三原の自然の素晴らしさを伝えたいです。でも、素晴らしい自然は日本中にあります。それでも「三原に行ってみたい」と思ってもらうため、三原の風景が印刷されたはがきをお礼状に使うなど、地道ですが興味を持っていただけるようにしています。

―最後に、市民の人へのメッセージをお願いします

故郷を離れて暮らしていますが、心の中には幼いころからいつも見ていた風景と大切な人の顔があり、どんなときも私を支え、励ましてくれます。この場所で育った子どもたちも、そうであってほしいです。誇れる故郷があることを幸せに思います。

▲思い出のたくさん詰まった母校、神田小学校を訪ねました